

未来を 模索する 高校生

今どきの生徒とどう向き合おうか

時代の変化と共に、高校生を取り巻く環境も大きく変化した。電子メディアに囲まれて育った現在の高校生は、何を考え、どんな気質を持つ傾向にあるのだろうか。そして、現場の教師は生徒とどう接していけばよいのだろうか。

「難関大進学＝幸せな人生」という従来の価値観が崩れ、生徒はどう生きればよいのかを見失った。電子メディアの出現などの変化で生徒を取り巻く環境も変化している。そんな中で育った今どきの高校生は、夢へのプロセスが描けない、低い進路意識、受動的ですぐに答えを求める、考える力の低下、新聞の政治・経済面を読まない、狭い社会的視野、社会ルールが身に付いていない、自己中心的、孤立を恐れる、希薄な人間関係といった言葉で語られる一方、電子メディアを駆使して自分をうまく表現するような、従来とは異なる多彩で際立った力を発揮する一面も持つ。

求められる指導

視野を広げ目的意識を育成 社会と触れる機会を作り、将来のモデルを見つける手助けをする
考えさせる仕掛けを できるだけ生徒に考えさせる機会を作り、「なぜ?」と問い掛け自己理解力を育成する
人とのかわりの中で、自己を高めていく場作りを 生徒同士が互いを知るきっかけを作り、刺激を与えながら高め合うクラスを作っていく

生徒の現状

東京成徳短大の深谷昌志教授のグループは昨年、進学校の高校生を対象とした日本と韓国の比較調査を行った。

それによると、難関大への進学希望率はほぼ同じのだが、進学後の将来像では日韓で大きな差が出た。例えば「有名(難関)大学に行けば自分の希望する職業に就ける可能性が高くなる」という問いでは、「とてもそう思う」と答えた生徒は、韓国の41・7%に対して日本は22・2%、「有名(難関)大学に行けば高い収入を得ることができる」は韓国26・4%、日本は12・5%。「難関大進学＝幸せな人生」という図式が、日本の今の生徒に通用しなくなっていることを如実に示している。

「たとえ東京大を出ても安定した生活が保証されているわけではない。そんな日本の現状に高校生が気付いたと

いうことでしょうか」(深谷教授)

そして問題なのは「難関大進学＝幸せな人生」に代わる新しい構図が、まだ見つけられていない点にある、と深谷教授は指摘する。高校生はどう生きればよいのか分からず、具体的な将来像をつかめない状態に置かれている。

また、深谷教授は高校生を取り巻く環境の変化として、電子メディアの発達が見逃しきれないと語る。メディア時代の到来によって、高校生でもパソコンやインターネットを駆使して、自己を外に発信できるようになり、ホームページ大学のホームページに独力でアクセスして情報を手に入れたりする者も現れている。その一方、テレビゲームに熱中して部屋に閉じこもり、自分だけの空間から出てこようとしていない若者を量産してもいる。後者のような生徒は、社会的な自立が遅れ、進路意識がなかなか持てない可能性がある。

今、高校生の姿がつかめなくなってきたと言われる。だが、そのことをただ嘆くだけでなく、背景を探っていくなくては、処方箋は見つからない。

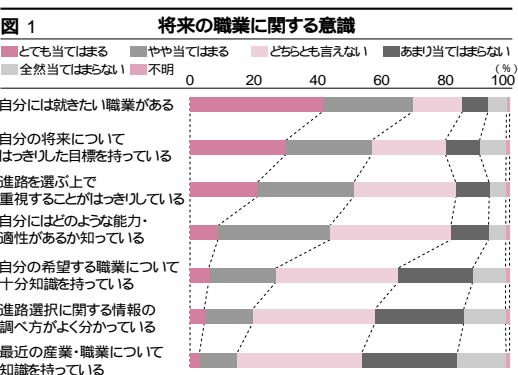


東京成徳短大教授 深谷昌志 Fukaya Masashi 教育社会学専攻、静岡大学教授などを経て現職。著書に『子どもの生活史』(黎明書房)など。

目標を見いだせない社会で、 模索する生徒たち

近

年、進路意識の希薄な生徒が目立つとよく耳にする。図1を見ると、「自分には就きたい職業がある」「自分の将来についてはっきりした目標を持っている」と答えた者の割合と比較して、「自分の希望する職業について十分知識を持っている」「進路選択に関する情報の調べ方がよく分かっている」と答えた生徒は少ない。夢はあっても、それを実現する過程については知識不足であることが分かる。



ベネッセ教育研究所「モノグラフ高校生VOL.57・大学受験の」現在」(99年)より。

夢を実現するための プロセスが描けない

教師の声

自分の関心から、安易に進路を考える傾向が広がっているように感じる。「パソコンゲームが好き」だから、ゲームソフトのプログラマーになりたいというのはその典型だろう。そんな短絡的な夢を叶えてくれそうな名称を冠した専門学校のコースも、確実に増えている。自分の興味も大切だが、社会的なやりがいや将来性、それに至る道筋も指標に入れて、進路を考えてほしい。(愛知県H先生)

進路意識は、自己と社会との関係に目を向けて、それについて考えることで養われる。まず、自分の興味・関心からスタートして、次にそれが社会の中でどういったやりがいを持つのか、現実社会の中で実現可能か、今後どのような勉強が必要なのか、などを模索しながら作り上げていく。社会体験の乏しい今どきの高校生は、社会との関係の中で自己の進路観を鍛え上げるプロセスが弱いと言えるのかも知れない。「アルバイト禁止の高校も少なくないでしょうが、アルバイトやボランティアを経験するのも、生の社会に触れるよい機会だと思います」(深谷教授)

2 受動的で すぐに答えを求めたがる

今の生徒は、物心ついた頃から、近所にはコンビニエンスストアがあり、欲しいモノは簡単に手に入る環境で育ってきた。また、友達と群れ遊びをする機会が減り、遊びの中で創意工夫をすることも少なくなった。家庭用ゲーム機やコンピュータが遊びの中で大きな位置を占めるようになり、さらに創意工夫の機会は減っている。つまり今の子どもたちは、プロセスを踏まなくても（考えなくても）よい環境下で育ってきたと言える。生活環境の変化が、考える力を低下させた要因の一つと考えられるだろう。

また教師の中には、塾の弊害を指摘する声もある。「町には小さな塾が増え、少人数教育や個別指導を売り物にしている所も多い。『一つ一つ塾では、自学自習をベースにして、行き詰まったらすぐに質問に答えてもらえるような、手取り足取りの形が主流になっている。このスタイルが思考力を育てることにならないのは言うまでもない』（愛知県H先生）」というのが一般的な意見だ。だが、H先生は続けて次のよう

教師の声

すべてについて指示待ちで、なぜそのような指示が出されたのかを理解できない。復習するようになっても、やり方を指定しないとできない。授業内容を再確認する作業が復習であると考え理解していない。（福岡県N先生）
最近の生徒は、考えるよりむしろ単純作業の繰り返しに抵抗なく取り組んでいるようだ。その一方、結果が見えず、考えながら結論を導くことにストレスを感じるらしい。（兵庫県O先生）

に語る。「子どもや親のニーズを受けてこうした塾が増えていることもきちんと受け止めなくてはいけない。結局、生徒の変化に対応して学校が変わらなくてはいけないのだと思う。」

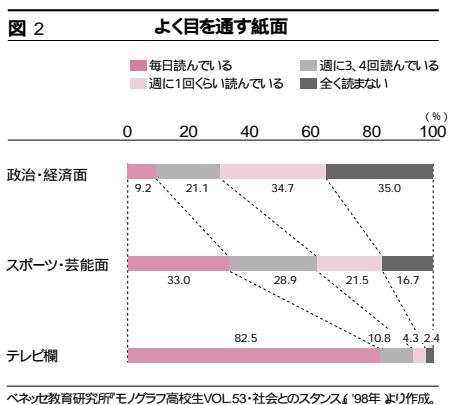
深谷教授も次のように指摘する。「子どもを取り巻く状況が大きく変容しているにもかかわらず、学校の授業の多くはテレビもなかった時代の教え方を踏襲しています。その中で辛抱強く授業に向き合うことを生徒に要求しても、うまくいかないのでは」メディア時代の子どもたちに、いかに自分で考える力を身に付けさせるかが、教師にとっての課題と言えるだろう。

3 新聞の政治・経済面を 読まない生徒たち

高校生が、新聞のどの紙面を熱心に読んでいるかについて調べたところ、ほとんどの生徒がテレビ欄には毎日目を通しての対して、政治・経済面を毎日読んでいる生徒は、10%にも満たないことが明らかになった（図2）。社会的出来事への関心の低さを示していると言えるよう。先にも述べたように、生徒たちの生活の大半は家庭と学校の往復である。

その中で、社会的関心の高い生徒像を望むこと自体に無理があるのかも知れない。さらに深谷教授は、次のように

高校生が、新聞のどの紙面を熱心に読んでいるかについて



ベネッセ教育研究所「グラフ高校生VOL.53・社会とのスタンス」'98年より作成。

教師の声
私は英語を教えているが、授業時間中に教科書の内容に付随して地域紛争や環境問題など、時事問題について掘り下げて説明したことがあった。授業後に感想文を書かせたところ、「英語の授業で言及する内容ではなかった」「余計な話が多すぎた」などと書いてきた生徒が数人いた。入試でもよく取り上げられるテーマであると言いきって話したのだが……。（宮城県W先生）

指摘する。「今はいろいろなメディアを通じて、地域のニュースから国際問題まで、様々な情報が一律に流されます。自己と社会との距離感がつかみにくい時代だと言えます」

だが生徒たちは、地球温暖化問題など、日常を通して感じ取れる社会問題には敏感であるという一面も持つ。「一度、社会的視野を獲得した生徒はほとんど成長する」と感じている教師は少なくない。「自分には関係ない」と捉えられがちな社会問題を、いかに生徒自身の問題として提示できるかがポイントと言えそう。

4 当たり前の社会ルールが 身に付いていない

学校は今まで、生徒が一定のルールを守り、授業中は教師の話に黙って聞くことを前提として成り立ってきた。だが、小・中学校はもとより、高校でもその前提が崩れつつあると感じている教師が増えている。これに対して深谷教授は、自己中心的で好きなことしかしない生徒が増えているのは、今の子どもたちの暮らし振りそのものに起因していると語る。

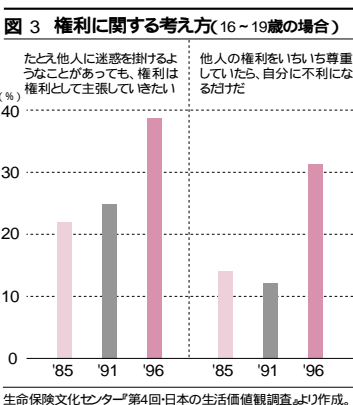
「家庭ではほとんど手伝いをすることもなく、子ども部屋に閉じこもっている。部屋の掃除は母親に頼っている。社会的な協同意識やマナーが身に付かないのは当然のことです」

多くの教師が、社会的マナーが守れていない生徒に注意をする。「なぜ先生はそんなことを言うのだらうっ」といった反応を返されるという経験をし

教師の声

掃除を怠けている生徒に注意をすると、「だってやりたくないんです」という反応が返ってくる。「やりたくなくてもしなければいけないことがあるのだ」という趣旨の話をして、ほんのこなしの様子である。（埼玉県K先生）
鼻をかんだ紙を授業中にもかかわらず、「ゴミ箱まで立って捨てる」授業中は立ってはいけないという感覚がないのでは、と思われる。（福岡県S先生）

ている。大人にとっては自明のルールであっても、生徒には当たり前のものとしては身に付いていない。教師はそのことを心に留め、生徒と接する必要があるだろう。



生命保険文化センター「第4回日本の生活価値観調査」より作成。

5 孤立を恐れて 意見を言わない

ネット教育研究所が'99年に行った、高校生活への満足度に関する調査では、「友だち」に満足しているという生徒が「とても」と「割合」を含めて76.6%に達している。これは「部活動」(43.3%)、「授業」(33.9%)と比べても極めて高い数値だ。だがデータとは裏腹に、教師は人付き合いの苦手な生徒が目立つと感じている。

「今の高校生は人間関係の結び方がすくなく下手ですよ。コミュニケーション能力は、小さな頃から仲間と時にはケンカをしながら身に付けていくものですが、子どもたちが空き地や路地自然の中などで集団で遊ばなくなっから久しい。彼らはどっぴろい風に他者にアプローチしたらよいか分からないのではありませんか」（深谷教授）
彼は決して、他者との関係を拒んでいるわけではない。むしろ他者との関係を結べばよいのか、経験不足のためにその手法が分からない、と言えそう。

「小学校や中学校の担任は、クラス

教師の声

クラス委員を選出する際、最近では立候補する者も推薦する者もない。そうした公的な場で立つことは避けるが、服装や髪型には気を遣い自己をアピールしようとする。（福岡県M先生）
ある生徒が、授業中、答えが分かっている問題でも、他の人が答えられないうちは、私も分かります」と答えます」と言っただ、自ら立候補して生徒会長となった生徒が、である。（千葉県H先生）

の集団作りにかんがりのエネルギーを注ぎます。高校でも、仲間と協力したり、時には気づかりながら一つのものを作り上げていく喜びを体験させることは必要です。高校でも小・中学校の取り組みを、もっと積極的に取り入れるべき時期に来ていると思いませんか」（深谷教授）

昔の生徒は、放っておいても仲間同士で互いに励まし合って前に進んでいく関係があった。だが、コミュニケーション能力が落ちてきている今の生徒に対しては、時には教師が関係作りのコーディネーター役として手を差し伸べることが求められるのかも知れない。

未来を 模索する 高校生

今までの生徒とどう違うのか

求められる指導

生徒が新しい目標を見つけて出すための手助けを



先に述べたように、日本の高校生は難関大に合格しても、自分の希望する職業に就いたり、卒業後に高い収入を得られるとは考えていない。事実、ビジネスの世界は能力主義時代を迎え、肩書きだけでは通用しない状況になりつつある。難易度の高い大学に入学できれば幸せな生活が待っているという図式は、もはやリアリティーを持たない。そこで大切になってくるのが、生徒が意欲的になれる新しい目標を、自分自身で見つけることである。

考える力が弱くなったと感じている教師が多いようだ。そんな生徒に対しては、日頃から考える場を提供するよう心掛けることも必要だ。また、自己中心的で好きなことしかしよつとしない、と言われる今の生徒たちを指導する際は、クラスという集団を利用することが考えられる。目立ちたくないと考える生徒が多い中で、自分の意見を表現しやすい場を工夫して設定したい。

現代の日本で、かつて高度経済成長期に誰もが豊かさを目指したような共通の目標設定はしづらい。それは高校生も同様であり、今後は自分で目標（生きがいや将来の職業）を見つけ、その実現のためのストーリーを描ける能力を身に付けることが求められている。

社会と触れる機会を設け、モデルを見つけてさせる

最近では、自分の親がどんな仕事をしているのかさえ、よく知らない生徒もいるようだ。子どもは本来、大人をモデルとして、自らの人生観、職業観を養っていく。ところがモデルを設定できず、目標を描けなかったり、目標を語っても思い付きレベルで止まっている者が少なくない。まずは、生徒を狭い空間から解放し、実社会に触れる機会を数多く設けることが大切だ。それが「こんな風に生きたい」というモデルを得るきっかけとなる。職場体験や、職業人を招いての講演会は、生徒の視野を広める代表的な行事と言える。

1 視野を広げ、目的意識を育てる

目標を実現するための三つのステップ

たとえ目標が見つかったとしても、それを実現するためのストーリーを描けなくては目標は夢のまま終わってしまふ。目標実現に向けて、具体的には以下のよつな作業が考えられる。

自分の興味の方角性を確認

その興味を学問や将来の仕事に結び付けるにはどうすればよいのか、情報収集を行い検討。目標が定まることで「なりたいたい自分」を明確にする。「なりたいたい自分」と「今の自分」のギャップを認識し、目標達成に向けて努力する。

また、明確な目標を持ち、現在の自分のギャップを認識できれば、好きなことばかりでなく嫌いなことも、目標実現のためには必要であることが理解できるだろう。また、目標に向けての勉強や生徒会、部活などの重要性を実感できれば、日々の学習態度や生活態度も意欲的になることが期待できる。

2 生徒自身に考えさせる仕掛けを

生徒たちに将来就きたい職業を挙げさせると、マスコミでもはやされている仕事を口にする者も多い。もちろん夢は実現するかも知れないから、彼らの希望を一概に否定するわけにはいかないだろう。しかし、「表面的なイメージだけで、自分に引き寄せて考えられていないのではないだろうか」と疑いたくなるのも無理はないだろう。

授業など日常の中で考えさせる場を設定

考える力が弱くなった生徒に対しては、当たり前のことだが、考えさせる場面を数多く設定していくことが必要になってくる。ある数学の教師は、生徒に考えさせるために、「教科指導の場面でのような工夫をしている」と言っ

「なぜ？」と問うことで自己理解力を養う

「いきなりハイレベルの課題を与えても、生徒は拒絶します。そこで、最初は少し考えたら解ける問題を設定し、その問題をクリアしたら、また少し難度の高い問題へと、細かくハードルを設定します。そんな風にして生徒の考える力、考えよつとする意欲を、徐々に引き出していくわけです。」

生徒に考えさせる機会は、教科指導だけでなく、進路指導や学校行事など、あらゆる場面で作れる。進路指導ならば、志望学部・学科が決まっている生徒に「なぜその学部・学科に進みたいのか」という作文を書かせる。「なぜ？」と問われることで、生徒は自己理解を深めていく。また、学校行事でディベート大会などを実施するのも有効だ。対戦相手に勝つためには、自分の頭で論理を構築して意見を述べることが要求される。生徒は楽しみながら、考える大切さを学ぶことができるはずだ。

特集 未来を模索する高校生

今どきの生徒とてい何の悩みか

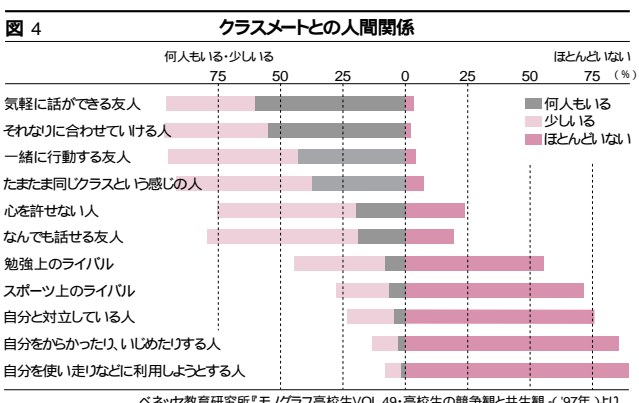
3 人とのかかわりの中で、自己を高めていく場作りを

最近の生徒は、集団の中で自分だけが目立つことを嫌う傾向にあるが、それはむしろ他者を過敏すぎるほどに気にしているからこそ、自らの行動を制限していると言える。その他者への関心を上手に活用して、生徒一人ひとりの能力を引き出し、伸ばしていきたい。

他者発見は自己の向上につながる

図4を見ると、「それなりに合わせていける人」「たまたま同じクラスという感じの人」が「何人もいる」の割合が高い。逆説的に言えば、お互いをもちと知る機会を設定すれば、クラスが生徒にとって、より多くの発見ができる刺激のある場となる可能性がある。

例えば、「将来の自己像」というテーマで小論文を書かせて、クラスメート同士で相互評価をさせる。いくら横並び志向の生徒でも、「自己の将来像」については自分自身の考えを書かざるを得ない。それをお互いに読むことが相手を知るきっかけになり、そこから本



音の話し合いができるよつになるかも知れない。生徒に身近なテーマで討論やディベートを行わせてもよいだろう。一度、人とのかかわりの中で自己を伸ばす楽しさを味わった生徒は、今度は自分から積極的に動き出すはずだ。教師には、その最初のきっかけ作りを担うことが求められているのだろう。

勉強の仕方が分からず 基礎学力も不足気味で、 集団内では目立つことを 避ける生徒が増えた



出席者
静岡県立掛川西高校
鈴木典夫
千葉県立佐倉高校
畠山滋
千葉県立長生高校
各務敬
茨城県立土浦第一高校
中島博司

「生徒が変わった」という声を聞くようになって久しい。生活環境の変化などにより、確かに生徒は変わっているようだ。生徒の姿容は、高校現場でどのような形で表れ、またそんな生徒に対してどのように接していけばよいのか。4人の先生方に話を伺った。

様々な面で生徒の変容を感じている先生が多いようです。先生方はどのようなシーンで、生徒の変容を痛感しているのでしょうか。

鈴木 今の高校に赴任した当初と今とでは、私の授業スタイルは随分変わりました。教科書を使わず授業を行いました。教科書は読めば分かるという前提で、そこに載っている言葉を説明なしでどんどん使っていました。いつの頃からか、抽象的な用語を理解できない生徒が増え、その結果、小学生に接するように噛み砕いて説明するようになりました。進学校の生徒だから知っている当然」という意識を捨てたんです。だからこの10年間で、私の言い回しは随分ぐどくなっています。

中島 私ははじめ本校の先生がよく口にするのは、基礎学力の低下ですね。

そんなに著しく進んでいるのでしょうか。中島 学力云々以前に、勉強の仕方がよく分からないという生徒が目立ちます。聞いてみると、ほとんどの生徒が中学校時代は塾に通っていたんですね。今の塾は何を使ってどう勉強すべきか、手取り足取り教えてくれます。その影響からか、昔なら生徒は自分で英語の予習や数学の復習をやっていましたが、今は高校でも手取り足取り教えなくてはいけない。私の前任校でも、1年次の早い段階で家庭学習のやり方を指導して成果を上げているようです。また家庭学習時間も減少しています。よく学年+3時間（1年生なら1+3で4時間）と言われますが、1、2年生でそんなにやっている生徒は少ないです。

鈴木 家庭学習ができないのは当たり前です。子ども部屋にはマンガ、CD、テレビ、家庭用ゲーム機が置かれ、プレイルームになっていきます。そんな環境で勉強しようというのには、こちら側に囲まれて減量するボクサーみたいなものではないかと（笑）。だから塾は今生徒に部屋を貸すビジネスに走っています。本校は間もなく百周年記念館を建てますが、そこには自習室を設置する予定です。

畠山 授業中のノートの取り方も下手になっていきます。高校には、板書がある



静岡県立掛川西高校教諭
鈴木典夫
Suzuki Norio
教職歴21年。
同校に赴任して11年目。
地歴公民担当。99年度は
教務課長を務めた。

小学生に接するように
噛み砕いて説明する
ようになりました



千葉県立佐倉高校教諭
畠山滋
Hatakeyama shigenori
教職歴16年。
同校に赴任して10年目。
地歴公民担当。99年度は
生徒指導部所属。

クラスの中で
目立ちたくない
志向があります



千葉県立長生高校教諭
各務敬
Kakimura Keiichi
教職歴17年。
同校に赴任して10年目。
地歴公民担当。99年度は
進路指導部長を務めた。

夢を実現するため、
努力できる生徒が
少なくなったのでは



茨城県立土浦第一高校教諭
中島博司
Nakajima Hiroshi
教職歴18年。
同校に赴任して6年目。
地歴公民担当。99年度は
進路指導部に所属。

計算力、漢字力の
著しい低下を
感じています

まり丁寧でない先生が多いですが、今の生徒はその不親切な板書を律儀にそのまま写すので、後でノートを読み返してもさっぱり意味がつかめない。教師は生徒が自分の頭で授業を理解して、自分なりにノートに整理することを期待しているのですが。

各務 私は授業に討論を取り入れていますが、内容が貧弱になっていますね。例えば日露戦争で日本はなぜ勝ったの

座談会

特に計算力や漢字力不足は著しい。そのため理系科目の授業で、内容は分かるが計算ができない、という生徒が出てきています。日本史では、「江田船山古墳は熊本にある」と教えると、生徒はそれ自体は覚えませんが、地図上で熊本県場所が分からない。中学校時代にトップ層であった生徒でさえそうです。各務 私は、夢は持っていても、その夢を実現するための努力をしたり、自分の能力を見据えて自己実現を目指していくという力を持った生徒が少なくなっている気がします。例えば、以前教えた生徒に大学で国際関係や法律の勉強をして将来は国連で働きたいという者がいました。しかし彼は2学期の時点で、私が担当する世界史も含めて4科目が落第点。冬休み明けに追試をやるから頑張るといってと励ましたのですが、全然勉強しませんでした。3学期の定期考査で挽回しますから、追試はしないでください」と言っんです。普通そんな状態なら、国連勤務なんて恥ずかしくて言えないはずですが、彼

は現状を変えようとせざる平気で夢を語る。これまでの学校教育は、目標に向かって子どもにコツコツと努力することを身に付けさせようとしてきましたが、自分の欲求だけを押し出している最近の生徒を前に、学校と生徒の間に不整合が起きつつあると思います。畠山 生徒同士の関係の取り方も、随分変わりました。端的に言えば、目立ちたくない志向です。定期試験直前の授業で、試験範囲は教え終わっていたので、「今日は自習しようか、それとも教科書を進めようか」と聞いたことがあります。でも、生徒は黙っています。手を挙げさせても数名しか反応しない。自分が意見を述べること、本当に自習したい生徒、あるいは先に進んでほしい生徒に影響を与えたくないんですね。そこで目をつぶって拳手をさせたところ、ようやくほぼ全員の手が挙がりました。文化祭でのクラスの出し物が自分の一言で決まるのなら、皆に影響を与える重大さを感じるのも分かりますが、たかだか1時間の授業をどうするかでさえそうです。

学力低下の根は
自己学習力が
身に付いていないこと

学力低下の話が出てきましたが、そ

特集
未来を
模索する
高校生

今どきの生徒とてい何の向きか



集団を活用して生徒の二極化に対応していきたい

かを話し合わせても、基礎知識がなくて論理構成力も弱いために、思い付きだけのおしゃべりに終始しがちです。

一口に学力低下と言っても、基礎知識がない。そして勉強方法が分からない。創意工夫ができないなど、いくつかの問題を抱えているようです。中島 学力低下の根はどこにあるかと言つと、何か問題に直面したときに自分の力で考えて解決する力がなくなっている、ということだと思います。それは学習面だけに見られることではありません。私が顧問をしている生徒会の仕事に、各部への予算配分がありま

多面的能力を發揮する生徒も現れてきた

中島 最近の生徒のマイナス面ばかり出てきましたが、私は昔に比べて今の生徒の方が伸びている面もあると思います。2年生の夏休みに、博物館、史跡を見学させ、レポートを提出させている。ほとんどの生徒がワープロで仕上げられますし、デジタルカメラやスキャナーを使っている者もいて、そのままにできるぐらいです。中身も高レベルのものが多く、優秀作品は学園祭で展示して、下級生や一般の方にも見ていただくようにしています。各務 確かに、以前は見られなかった教師もびつくりするような素質を持った生徒も現れています。今年、慶応大の総合政策学部に入試で合格した生徒がいましたが、いわゆる受験学力

はそんなに高くない。ところが「社会科教科書論争の整理と分析」といったレポートを発表したり、自主CDやドキュメント映画を作ったりと多面的な能力を發揮していました。そういう生徒は、従来はあまりいませんでした。鈴木 今起きているのは、生徒の二極化現象だと思います。「個性の伸長」という教育改革のねらい通りに育ち、多彩な能力を發揮する生徒が現れる一方で、ノートの取り方や勉強の仕方をケアする必要のある生徒も増えている。

各務 私も二極化は感じていますが。だからこそ集団の力を有効に活用することが大事だと思います。私が授業で討論を取り入れているのはそのためです。A君の意見に対して、B君とC君が調べて考えて反対材料を出す。そういう生徒同士の揉み合いの中で向上心は培われていきますからね。中島先生の土浦第一高校のように、優秀なレポートを下級生の目に触れさせる機会を作るのも、とてもよいことだと思います。



人間としての親しみを抱かせることが必要では

研究をしているとか、今度こんな本を出すとか、先生も勉強してるんだよと生徒に伝えます。そうすることで生徒に教師としての魅力的だと感じてもらえれば、次第に「あの先生についていこう」となるんじゃないでしょうか。

魅力ある存在として生徒を引っ張っていく

かつて自明のものとしてあった、教師と生徒の役割関係は崩れつつあり、今後は個々の教師が、個性や力量によって生徒に魅力的だと感じてもらうなくてはならないということですね。中島 それは昔からそうだったんですよ。私が高校生のときも素晴らしい先生がいて、その先生の背中を見て、勉強は面白いな、などと思ったものです。鈴木 今の小・中学校の先生は、友達感覚で生徒と接することが多いようです。そこが昔とは違う点です。しかし、高校生に対しても友達感覚で接している指導はできないでしょう。これからの教師は、学識や個性といった人間的な力で指導できて、かつその力によって教室に秩序を作り出せる存在でなくてはならないと思います。



人間的な力で教室に秩序を作り出せる存在に

ら、各先生がそれぞれの面で、生徒に魅力的だと感じてもらうように心掛けることが必要だということですね。そこで再び先程の質問に戻るのですが、個性を上手に伸ばしている生徒がそうでない生徒に刺激を与えられるようなクラス作りができるのが理想だと思います。しかし、目立ちたくない志向の中でそれが可能なのでしょうか。鈴木 リーダーシップを發揮できる生徒がクラスに数人いれば、自主性を育む指導ができますが、最近そういう生徒は少ない。そのとき担当が委員長役まで務められるかが、クラスを活発にできるかの力ギとなるでしょう。そして、とことんまで面倒を見た後、どこで突き放すか、その見極めが重要です。

未来を模索する高校生

今どきの生徒とどう向き合おうか



自分の背中を見せれば、生徒もついてきてくれる

徒は増える。今どきの生徒には、信頼関係を作った上で「それで本当にいいの？」と問い掛けたい。また担任が文句言ってる」で終わってしまう。でも担任と生徒、あるいは生徒同士の信頼関係ができれば、目立ちたくない志向の生徒でも自分の意思を表現したり、相手の意見に突っ込んだりという場面が、多少見られるようになります。各務 中島先生のおっしゃることはよく分かります。私も教師は生徒に対して裸でぶつからなくてはいけないと思つています。しかし一方で、これだけは教師の立場として生徒に押し付けなくてはいけないという部分もあるような気がします。例えば、遅刻する生徒が多いクラスが1クラスだけあったと

します。そのクラスの遅刻を見逃しては、学校全体が無法地帯になってしまうかも知れない。最低限の部分については教師の立場として生徒に押し付けるんだ、と入学後の早い時点できちんと伝えるべきだと思います。もちろん生徒に寄り添う姿勢は大切ですが、中島 確かにそうですね。しかし今どきの生徒に対しては、もっと教師自身が人間を剥き出しにして接することが求められているように感じます。鈴木 かつては教師という看板を盾にすれば誰でも生徒を指導できました。しかし、今では生徒との間に人間関係を築いてからでないと指導はできません。私も、それほど面識がなく人間関係ができていない生徒に「何やってい

るんだ」と頭ごなしに叱ることはしなくなっています。極端な話、それでその子が学校に来なくなってしまう可能性があります。ただ、人間関係に頼るだけではなく、教師は生徒に何か「あの先生は魅力的だな」と思わせるものを持っていないと秩序は保てません。その魅力は、各教師ごとに異なつて当たり前で、中島先生のような生徒に寄り添うタイプがいていいし、僕のような強面もいていいと思います。中島 私は自分の背中を見せるようにしています。例えば今どきとい



これからの時代の教師と生徒の理想的な関係とは？

しかし、目立ちたくない志向で、お互いに影響を与えるのを回避する状況では、生徒同士の揉み合いの実現は難しいように感じます。そんな生徒に、教師はどう接すればよいのでしょうか。中島 私が心掛けているのは、人間として生徒に親しみを持ってもらうことです。教師の立場からモノを言つて生徒に何らかの影響を与えるというのは教師に権威のあった時代の話だと思つてます。例えばクラスの半数近くが遅刻をしたとします。私は「今日は遅刻者が多くてけしからん」と叱らず、「俺が朝寂しいだろうが、ちゃんと来いよ」と言つたんです。もちろんドラマではないので翌朝から全員が揃うことはないんですが(笑)、それでも時間を守る生

で、とことんまで面倒を見た後、どこで突き放すか、その見極めが重要です。各務 本校にも、目立ちたくない志向の中で、魅力ある生徒が自分を出せないクラスがあります。その生徒の魅力をどうやって引き出すか、というコーディネーターとしての役割が、今の教師に求められていると思います。(終)